

日本現代文學
全集
26

伊藤左千夫
長塚節集

日本現代文學全集 26

伊藤左千夫
長塚節集

編集 伊藤 整・亀井勝一郎・中村光夫・平野 謙・山本健吉

日本現代文學全集

26

伊藤左千夫・長塚 節集

編 集
伊 藤 整
龜 井 勝 一 郎
中 村 光 夫
平 野 謙
山 本 健 吉



初版 第1刷
昭和38年7月19日
増補改訂版 第1刷
昭和55年5月26日

著 者 伊 藤 左 千 夫
長 塚 節

装 幀 蟹 江 純 治

發 行 者 野 間 省 一

發 行 所 株 式 會 社 講 談 社

印 刷 東 洋 印 刷 株 式 會 社
製 本 藤 澤 製 本 株 式 會 社

東京都文京區音羽 2-12-21

郵 便 番 號 112

電話東京03 (945) 1111(大代表)

販 替 東 京 8-3930

落丁本・製丁本はお取りかえいたします
Printed in Japan

伊藤左千夫集 目次

卷頭寫眞
筆蹟

伊藤左千夫歌抄……………三

分家……………元

野菊の墓……………三八

叫びと話……………三〇

作品解説……………山本健吉 四三

伊藤左千夫入門……………山本英吉 四六
年譜……………四七
参考文献……………四七

長塚節集目次

卷頭寫眞
筆蹟

長塚節歌抄……………三九

土……………六四

炭焼のむすめ……………四六

芋掘り……………四三

寫生の歌に就いて……………四九

茂吉に與ふ……………五一

作品解説……………山本健吉 四三

長塚節入門……………山本英吉 四六

年譜……………四七

參考文獻……………四八

伊藤左千夫集

あめつちね

なと乃

まにまにふ

くむし

やさくらく

さ如

陀平し

良也

左子大

伊藤左千夫歌抄

明治三十三年

牛飼 (巻)

牛飼が歌よむ時に世のなかの新しき歌大い
におこる

春雨

春さめのふた日ふりしき背戸畑のねぎの青
銚並み立ちにけり

雑詠

むら雨のすぎにしあとに入日さし庭の萩は
ら花かがやくも

こほろぎ (巻)

八月二十八日の嵐は、堅川の満潮を吹きあ
げて、茅場あたり湖を湛へ、波は疊の上
にのぼりぬ。人も牛もにがしやうて、水
中に獨夜を守る庵の寂しさに、こほろぎの

音を聞きてよめる歌

うからやから皆にがしやうて獨居る水づく
庵に鳴くきりぎりす

牀のうへ水こえたれば夜もすがら屋根の裏
べにこほろぎの鳴く

くまも落ちず家内は水に浸ればか板戸によ
りてこほろぎの鳴く

只ひとり水づく荒屋に居残りて鳴くこほろ
ぎに耳かたむけぬ

牀の上に牀をつくりて水づく屋にひとりし
居ればこほろぎのなく

ねば玉のさ夜はくだちて水づく屋の荒屋さ
びしきこほろぎのこゑ

物かしぐかまども水にひたされて家ぬち冷
かにこほろぎのなく

まれまれにそとに人の水わたる水音きこ
えて夜はくだちゆく

さ夜ふけて訪ひよる人の水音に軒のこほろ
ぎ聲なきやみぬ

水づく里人の音もせずさ夜ふけて唯こほろ

ぎの鳴きさぶるかも

百花園

とりどりに色あはれるなる秋草の花をゆすり
て風ふきわたる

秋草の千ぐさの園にしみ立ちて一むらたか
き八百蓼の花

榛黄葉

閑鐘が庭なるはしげみの黄葉を見て詠める

七葉八葉なほ残りたるはしげみの黄葉のさ
枝見れどあかぬかも

榛の實もいちじろくあらはれて黄はめる
木の葉や落ちつくす

片庭のはしはみ黄葉落ち散りて残りすくな
みはや冬さびぬ

明治三十四年

冬牡丹

さきくさの三つの蕾の一つのみ花になりた
る冬深見草

咲きなつむ冬のぼたんの玉蕾いろみえてよ
り六日へにけり

雨中花に對してよめる

花ちらふ隅田の河原の寺島に雨ふりくれて
蛙なくなり

遠人も袖ぬれきつつ春雨のさくらの宿に茶
の遊びすも

一しきり渡らふ風は春雨に千垂の花の露ゆ
りおとす

花ごとに露の白玉ふみたるくはし櫻に夕
日さし來も

藤

龜井戸の藤も終りと雨の日をからかさし
てひとり見に來し

池水は濁りににがり藤なみの影もうつらず
雨ふりしきる

雨夜の牡丹

とし火のまおもに立てる紅の牡丹のはな
に雨かかる見ゆ

ふる雨にしとどぬれたるくれなゐの牡丹の
花のおもふすあはれ

さ夜ふけて雨戸もささずさ庭への牡丹の花
に灯をともし見つ

菖蒲園に遊ぶ

夕汐の満ちくるなべにあやめ咲く池の板橋
水つかむとす

夕やみは四方をつつみて關口の小橋のあた
り鳩鳥の鳴く

折々の歌

八月五日、庭先なる小田の蓮の花六もとば
かり切探りて床間にさしたり。水よくあげ
てうるはしさ云はむ方なし

くれなゐの蓮の八花を廣床のかめにを挿せ
ばかりを家にみつ

くれなゐの八重てり匂ふ玉はすの花びら動
き風わたるかも

何事につけても正岡大人をおもふ
吾が大人が病おもへば月も蟲もはちすの花
もなべて悲しき

房總遊草

西上總に入る道すがら蕎麥の花を詠める歌
ども

打日さす都路いでて山ざとの蕎麥のはたけ
を見ればたのしも

秋さぶる粟もろこしの畑並に蕎麥のはたけ
は花さかりなり

夕寒み森こえくればあしびきの山畑蕎麥の
花しろく見ゆ

かぎろひの夕畑蕎麥の白き花の寒く見え
てころさぶしも

あしびきの岡邊の里の蕎麥畑に夕げのけむ
りなびきただよふ

畑なみの蕎麥の花むら遠白くそぐへの森に
馬つなぐ見ゆ

あかねさす夕日かげ落ち蕎麥畑のあぜの襟
を百舌鳴きうつる

明治三十五年

詠接骨木

鎌倉なる大佛をろがみて
詠める短歌

かまくらの大きほとけは青空をみ笠と著つ
つよろづ代までに

蒼空を御笠と著せるみほとけのみ前の庭に
梅の花さく

春雑歌

軒の端の楓の芽立くれなゐに色いちじろく
なりにけるかも

そき竹の垣根のものと芍薬の赤芽ともしく
群立ちにけり

井戸端の石間に生ふる鬼半齒のうれ巻く芽
立色樺にあはれ

みどり子の眞手の手のひら開くなす軒の八
手は芽立のびにけり

あからひく朝日さしぬれ野官蘭の朽ちし離
に陽炎の立つ

少女らがゑまひの眉の兩ひらくたづの柔葉
の見えるよろしき

童らがいまちよろこぶ木耳のむせるたづの
木花くき立ちぬ

朝月の四つ目垣根の裏戸邊にはのぼの咲け
り山たづの花

葛飾の小梅にありしたづの木の花枝折り來
し君に見せむため

荒妙の藥屋が背戸の井戸ばたに生ふるたづ
の木花さやに咲く

足びきの山たづの木の春の葉の向ひたくひ
てあらむ世もがも

黒樂の碗

王寅の春、樂道入の茶碗を得たり。贈
しき抑へがたく即ち作れる歌

神代より只ひとりある陶つくり能牟許が碗
を二つわが得し

左千夫われ牛飼なれど樂燒のひじり能牟許

が碗持ちほこる

東北遊草

あけの朝雨ふるに稻をいつ

朝あけのほろかけ車ほとほとに宮城の町
を見ず過ぎにけり

秋夜山行

月代に蟲が音しぬび山路ゆく衣は濡れぬ山
のさざりに

さ霧立つ月夜山みち山畑の豆葉もみちて散
りしける見ゆ

子規子百日忌

しきたへの枕によりて病み臥せる君が面か
げ眼を去らず見ゆ

明治三十六年

釜の響

釜大なれども音がすかなり。波の連音にも
似たらむか

氷解けて水の流るる音なり
これ故正岡大入が、吾が所蔵の釜に題し賜

ひし所、今宵しも其釜をかけ、爐邊近く机
すゑつつ、さ夜ふくるまに釜のひびきい
やさやに耳立ち、ありし世の事どもそぞろ
に思ひいでて感慨とどめあへずなむ

釜たぎる湯氣の煙のおぼろげにみかけ見ゆ
らく吾が戀ふれかも

朝宵に思ひは絶えずしかすがにこの釜の音
にしぬびかねつも

爐にかくれば時じく滾る釜の音は聞かば聞
くべし大人に逢ひ難き

釜の音にありし世思へば其夜らのありのこ
とごと眼に浮びくも

さ夜ふけて釜の湯の音はいや細り命たゆか
に心かなしも

蛙

さ夜ふけて聲乏しに鳴く蛙一つともきこ
ゆ二つともきこゆ

青野原川ひと筋のながき日をものさびしら
に鳴く蛙かも

岡田村

大月廿七日、平福百穂と筑波山に至る。長

塚邊芽又岡田より来て登山を共にす。翌々
廿九日、長塚が家に宿る。晩雨新に晴れて
邸宅清麗を加へ、庭苑の竹木又相悦ぶに似
たり。即作歌數章後の記念にあつ

さざり立つ岡田の里は朝鳴きに松雀しば鳴
く家の忌森に

吾庭の松

軒の端に立てる蚊ばしら水打てば松の木ぬ
れにたち移るかも

松のまをもる月讀は今かへし靈井の水に御
影ただよふ

秋のかぜ吹きゆるなべに下草の木賊がなか
に松葉落ち散る

水のごと清き月夜に松葉ちる庭にしあれば
世のおもひなし

明治三十七年

草花

ひさかたの青葉の晴をこちよみ草花買ふ
と龜井戸に來つ

玉のゆらぎ

あかねさす紫の玉の勾玉を帶にとりはけ立
ちの樂しも

吾を呼びて玉持の翁と君は云へどまことは
吾は玉ほこりの翁

秋海棠

をみなども朝ゆふいでて米あらふ背戸川岸
の秋海棠の花

朝川にうがひに立ちて水際なる秋海棠をう
つくしと見し

秋海棠のさはに咲きたる背戸川に米とぐ女
の兒手白足白

米あらふ白きにごりは咲き垂れし秋海棠の
下ながれ過ぐ

百花園

露繁き萩をし見むと朝晴の須田の寺島くれ
ばたのしも

今朝のあさ咲きさかれるは女郎花桔梗のは
な我毛香の花

百草のなべての上に丈たかき秀蓼の花も見
るべかりけり

朝づく日さしくるなべに草村の根に鳴く蟲
も聲ひそみなく

あからひく朝日おしける花原の園のまほら
に蜻蛉むれ飛ぶ

小園秋深し (全)

朝なさな露の寒きにわが園の秋草なべてさ
びにけるかも

葉鶏頭をいやしとを云へ秋ふけて色さびぬ
れば飽かなくおもほゆ

秋草のいづれはあれど露霜に瘦せし野菊の
花をあはれむ

山茶花

さわやかに蒼空すみて山茶花の日和しつけ
く茶をおもふ頃

初冬宿山寺

ただ二人法師と吾と居る寺を雲はつつめり
心あるらし

甲信遊草

十一月二十三日、中央線に乗りて甲斐の鹽
山停車場に下れば、神奈根村来つて茲にあり。
少しく晚けれども見てゆかむとて向嶽
寺惠林寺を廻る。夜に入りて桃村が家につ
く、飯島虹枝・岡千里等來訪、次で虹枝が
勤むるままに同氏の家に到る。四人歌を談
じて夜の更くるを知らず。予は惠林寺の著
古忘れ難きを語る。

夕寒み道まはるとも惠林寺はをろがみゆか
む旅のしるしに

廿四日晴朗、桃村予がために東道の主人と
なり御嶽の勝を探る。予は日光を見て日光
以上と思へり、耶馬溪を見たる人は耶馬溪
以上と云ふと云へり、別に記さむと思へば
茲には省く。二十五日上諏訪に至る。久保
田山百合道にありて予を待つ。一見舊の如
く相携へて旅亭にゆく。二十六日諸同人遠
近相會するもの十餘人。徹夜歌を詠む
をふね
汲湯して小舟こぎ行く諏訪少女湖の片面は
時雨ふりつつ

廿七日山百合・千洲・柳之戸・竹舟郎と予
と合して五人、蓼科の麓、北山村麓の湯に

赴く。又新湯の名あり。途中竹舟郎は妨げ
起りて家に歸る。此夜湯に浴し爐を圍みて
途上屬目を賦す

天そそりみ雪ふりつむ八ヶ嶽見つつを來れ
ば雲岫を出づ

ひさかたの青雲たかく八ヶ嶽嶽峯八つならぶ
雪のいかしさ

岡の邊の茅生の茨の立ち枝は茜せりけり霜
をしみかも

蓼科のみ湯戀ひ來ればくまぐまに石の御佛
みちしるべせり

春草をしみと肥えみと諏訪人の岡に水引く
事は珍らし

北山の夕照る岡に立つわれを遠にとりまく
信濃群山

明治三十八年

無一塵庵歌帖

釜は初代家雄の作、茶碗は本阿彌光雨の作、
草庵の重寶なり。

冬の夜のさ夜静まりて釜の煮えさやさや鳴
るに心とまりぬ

爐に近く梅の鉢置けば金の煮ゆる煙がかか
るその梅が枝に

此金の煮えをしきけば秋の夜の蚯蚓が鳴く
に似てを偲ばゆ

赤樂の色の潤ひ言に言へず繪にもうつせぬ
宛にしありけり

赤樂のゆたけき形の大き宛徳川の世の盛お
もほゆ

牛飼

搾りたる乳飲ましむと吾來れば慕ひあかく
もあはれ牛の兒

花の一日

青苔に花ちる庭におりあそび雀の子二つ朝
の静けさ

草庵の若葉

庭に一株の楓、幹は三本に生ひ立ちて枝張
などいと面白く、若葉瑞々しき此頃、朝青
に打聆めつつ、思ふとはなく詠める歌

槐蔭わか葉こほしみたたずめば月遠くよ
り吾を照らせり

行々子

垣外田の蓮の廣田を飛び越えて庭の槐に來
鳴く葦切

五月雨に茶を抹き居れば行々子槐が枝にこ
ゑ斷たず鳴く

聲遠くつねは聞きたる行々子いま庭にして
暫しまどひつ

さみだれを朝寝し居れば葦切が聲急き鳴く
も庭の近くに

小園秋來 (念)

十日に足らぬ旅なりしを、秋風限なき小園
のさまや。一夜二夜と吹きすさみけむ風の
あとを掃はねば生々しき落葉の亂れ、草む
れいと深きに、垣根の輪扇やそここの群
野菊などもの寂しさに咲き出でたる、今し
も主人を迎へてとりどりに待ちわびし思ひ
を訴ふるにや。なかなか看過くし難き趣
になむ。新に室を掃ひ空だきゆかしく湯を
呼びて茶を立てつつ聊か懷を遣ふ

うなゐらが植ゑし酸漿もとつ實は赤らみに

たり秋のしるしに

秋立つとおもふばかりをわが宿の垣の野菊
は早咲きにけり

手弱女のころの色を匂ふらむ野菊はもと
な花咲きにけり

射干の丹づらふ色にくらぶれば野菊のはな
はやさしかりけり

むらさきのか弱に見ゆる野菊には猛き男の
子も心なぐらし

生死もわかず年經し猛夫等も秋かぜ立つに
家思ふらむか

まつ人も待たる人もかぎりなき思ひ忍ば
む此秋風に

梅の落葉

秋風の寒くし吹けば梅ぞのは其葉散りつつ
蕾もてる見ゆ

いつしかとあをしが來鳴く梅の樹の骨あら
はれて秋くれむとす

つねさはふ岩井の水に梅の葉の色づき散れる朝しともしも

梅が枝は葉はなかなば落ち骨立ちて月かけ寒し秋にはあれども

初冬雜詠

山の手は初霜おくと聞きしより十日を経たり今朝の朝霜

家ぬちに蠅ひとつ居ずあさづく日光こひしき冬とはなりぬ

白菊のしべ紅ばみてこほろぎも鳴かず霜おくけさの静けさ

鶺鴒の來鳴くこのごろ藪柑子はや色づきぬ冬のかまへに

塵塚の燃ゆるけむりの目に立ちて寒し此ごろ朝々の霜

爐開きの室の花には錦木にやつれの野菊そへ插せるよし

朝霜のしづけ庭にあをじ鳥來ては鳴きつつ影樹に動く

霜くもり淡き日かげは斜めさしガラス障子は透きて映れり

無一塵庵歌帖

初冬の連日、空に雲なく地に風起たず。霜居最も意に通ず

空澄める初冬の庭に吾立つと小鳥が來鳴く篠の小藪に

松が根の苗の楓は色おそくいまだ残れり霜ふりしかど

天地の恵みのなごみ思ふ時足はぬころ毫末もなし

天地の美しき物隈も落ちず能く見る人し尊くあるらし

靜 (全)

さ夜ふけの空のしらしら霜白き月夜入江を人渡るみゆ

浦遠く人等數多が小夜ふけに物も語らずしづしづゆくも

沖とほく夜舟の笛の音曳くやとよみは波の上渡りくも

霜けぶる入江遠舟火を二つ波も動かず小夜ふけにして

ゆきすぎし旅の人どち夜煙に聲遠のきぬ見れど見えなく

天地は眠りにしづみ小夜ふけて海原遠く月朱にみゆ

明治三十九年

日知の釜

よき人の日頃用ひ給へる釜とて世に傳はれるものに同形同種のいと古き釜を得ぬ。即ち嬌しき思を歌ふ

いにしへの煮えの音偲び一人居り聖さびすも梅かをる夜に

春雨に雪とけ流れ山川のあふれみなぎる思ひす吾は

現世の人の氣絶えし眞夜中に聖の釜の煮えの音を聞く

無一塵庵歌帖

正月二十日夜舞大人の家に招かる。茶碗は

例の道入の黒髪なり。涙出でむ許り嬉しく
後に歌詠み送る。またかと眉寄する人もあ
らむか

世のなかの愚が一人樂焼の茶碗を見ては涙
こぼすも

成東歌會

ひさびさに家歸り見て故郷のいま見る目に
は岡も河もよし

梅雨金閣 故事連作 (全)

八十國のつかへまつりて作らへる鹿苑院は
青葉せりけり

五月雨に寂し池水鴛鴦二つ將軍いまだ朝寢
ますらし

とりよろふ衣笠山を吾が林泉の奥の見立と
好み高かり

ひむがしの松の林の清邊に立てば眼に入る
衣笠の山

金閣を圍む池水池水をかくむ不立や君がお
もかげ

おぼしまに手弱女倚れる金閣を霧らふに見

れば夢に似るかも

女の童二人おり立ちなぎさ踐み雲間うかが
ふ衣笠の山

五月雨の北山殿にまゐりたる公達いまだ目
どほりを得ず

將軍の嗽ひにかしづく手弱女が二人端居に
立ちてさむらふ

將軍の目覺むあだかも雲間洩れ日の光り落
つ池の島山

お廣間は寂と神さび花瓶を四尺の青磁對に
据ゑたり

私の調をたまはる明の使者北山殿に物た
てまつる

公の職はやめつ今日よりは閣のあるじぞ
山ほととぎす

繪だくみは馬遠夏珪の墨繪をと君望ませど
未だ得まさず

さみだれのまた降りいでし午過を君閣上に
明兆を召す

かくやくと黄金かがやく高閣に佛の御影を
拜し給はく

金閣は歌舞にふさはず林泉の高き好みは見
るに潔けし

み灯霞む鹿苑院の沈の香や山ほととぎす閣
近く鳴く

奢名を君に着せつつ萬代に人はめづらむこ
れの殿居は

青葉 抒情連作 (全)

櫻葉の青葉の蔭にもみうらの匂へる君を今
も見る如

一目見ておもそらしけむ君が目を青山枯れ
む日にや忘れむ

吾がこころ青葉の岡の常色に秋をなみかも
思ひかれねば

うつせみの醜のことわりたゆたはば青葉時
過ぎ霜に逢はむかも

思ひつつ逢ひしわが目に紅の妹が袖つま見
けむ時はも

吾思ふ千重の^{ひとへ}一重も相思はば青葉に渡る風
に寄せこそ

久方の月も出でけむ葉櫻に相語れりしこと
は夢かも

鱒曳く^{ちづき}地曳のあみのくりなはの繰言なれや
片戀にして

あしびきの岡の葉櫻^{いばな}五百枝さし思ひ繁くも
君に逢ひがたし

白たへの麻の衣にもみうらの匂へる妹を青
葉し山

吾思ひ息に^{おぼ}いづらむ思寫す紙もあらなむ青
葉し山

青葉吹く風は吹けども紅の袖し吹かねば見
るに寂しゑ

わが庭の青葉吹く風^{わがふち}吾思ひを傳へか吹かむ
君が岡べに

わが心青葉に風のしきゆらぎ思ひすべなみ
言にづ^{こと}吾妹

わが知れる言葉きはまり^{わがふち}吾思の一重もつき
ず青葉ゆる風

蓼科游草

丙午八月、信濃甲斐の間に汽車通ひ初め
つと聞きて、此の五日に一周を思ひ立ちぬ。
先づ松本なる浅間の湯に胡桃澤・翌月・堀
内の諸子と會す。湯に上原三川子あり。各
舊知の人々なれど又初見の人なりけり。談
笑夜をこめて盡きず。翌七日胡桃澤・翌月
の二子子を山邊の湯に誘ふ。山邊の湯は又
湯の原の湯とも云ふ。此のあたりの地名殊
に優美にして趣亦それになふ。詠み捨て
たる歌數首を録す

奈良井川さやに霧立ち遠山の乗鞍山は雲お
へるかも

殿山のたをりを過ぎて湯の原にわが行くみ
ちに花折る少女子

みすず刈る南信濃の湯の原は野邊の小路に
蕤の花さく

夕されば河鹿鳴くとふすき川旅のいそぎ
に書見つるかも

いたみ寝へつるまに、日毎に近き尾の上
に遊びつつ、はがきといふものに参らしき
草花など寫して人々の許につかはしぬ。筆
のままだに書添へたる歌數首

蓼科の山の奥がとおもひしをこは花の原天
つ國原

うつそみの世の人われはひさ方の天の原な
る花の名は知らず

天雲のいや遙けくと晴れし日に下つ國原見
ゆるかと思ふ

むらさきの玉の散らくと見し花は吾日本な
る桔梗の花

合歡木 (き)

秋立つと未だいはなくに我宿の合歡木はし
どろに老いにけるかも

秋の色に老いし合歡木の葉しかすがになほ
宵々に眉作るあはれ

庭の木のさびれ合歡木の葉しひたぐる風も
のものし荒れ來るらむか

此ゆふべ合歡木のされ葉に蜘蛛の子の巢が
くもあはれ秋さびにけり

明治四十年

朱樂

おほろかに二つ買ひたるじやぼん玉袂に入

らねば手にもてあます

瓔珞

二月某日来訪せむと云ひこせる下總の寺田
憲氏が遂にさはりありて来らずなりければ
ひるすぎの人待つ庵にいたづらに木の影動
き釜の音すも

磯の月草 (全)

上總なる九十九里に暮を避け一夕磯原に造
遙しつ秋立つ天外の雲を眺めて歌數首を
得つ
九十九里の磯のたひらは天地の四方の寄合
に雲たむろせり

秋立てや空の眞洞はみどり澄み沖べ原のべ
雲とほく曳く

ひさかたの天の八隅に雲しづみわが居る磯
に舟かへり来る

ひむがしの沖つ薄雲いり日うけ下邊の朱に
海暮れかへる

わたつみの磯の廣らに三人居り八隅暮れゆ
く雲を見るかも

をさなきを二人つれ立ち月草の磯邊をくれ
ば雲夕焼す

白雲もゆふやけ雲も暮れ色にいろ消えゆく
も日は入りぬらし

水籠十首 (全)

八月二十六日、洪水假に家を浸し、床上二
尺に及びぬ。みづく煎餅の片隅に棚やうの
怪しき床をしつらひつつ、家守るべく住み
残りたる三人四人が茲に十日餘の水ごも
り、いふせき中の歌おもひも聊か心なぐさ
のすさびにこそ

水やなほ増すやいなやと軒の戸に目印しつ
つ胸安からず

西透きて空も晴れくるいささかは水もひき
しに夕餉うましも

ものはこぶ人の入り来る水の音の室にとよ
みて闇響すも

物皆の動きを閉ぢし水の夜やいや寒々に秋
の蟲鳴く

一つりのらんぶのあかりおぼろかに水を照
らして家の静けさ

灯をとりて戸におり立てば濁り水動くが上

に火かけただよふ

身を入るるわづかの床にすべをなみ寝ても
いをねず水の音もせず

がらす戸の窓の外のををうかがへば目の下
水に星の影浮く

庭のべの水づく木立に枝たかく青蛙鳴くあ
けがたの月

空澄める眞弓の月のうすあかり水づく此夜
や後も思はむ

龍膽

龍膽の繪に添へて無一庵庵主に贈る
八幡の代々木の森は紅葉して龍膽の花今さ
かりなり
素明山人

龍膽の花の名ところは豊多摩の代々木につ
づく八幡の森
君来ずや代々木の山は森つづき小笹の原を
龍膽の咲く

和してよめる

露霜に色のさびたるむらさきの龍膽のはな
よわれ思ひ多し

わが戀ひてなげきし人の好みりし龍膽の花
をくれし君かも